小　学　校

平成 31 年度(2019 年度)

教育研究員研究報告書

生　活

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 ･････････････････････････････････････ 1

Ⅱ　研究方法と内容 ･･･ 2

1　基礎研究

2　調査研究

3　実践研究

4　研究構想図

Ⅲ　検証授業

〈指導事例（1）：第１学年〉･････････････････････････････････ 5

〈指導事例（2）：第１学年〉･････････････････････････････････ 10

Ⅳ　研究のまとめ ･･･ 15

研究主題

生活科の深い学びを実現するための表現活動の工夫

Ⅰ　研究主題設定の理由

「小学校学習指導要領解説生活編（平成 29 年７月）」には、「深い学び」について、「生活科においては、気付きの質の高まりが深い学びであると捉えることができる。（第５章第１節２）」と示されている。このことから、生活科の「深い学び」とは、「気付きの質の高まり」であると捉えた。

また、「気付きの質」については、「無自覚だった気付きが自覚されたり、一人一人に生まれた個別の気付きが関連付けられたり、対象のみならず自分自身についての気付きが生まれたりすることを、気付きの質が高まったという。（第２章第１節３（１））」と示されていることから、①「無自覚」から「自覚」、②「個別」から「関連」、③「対象」から「自分自身」といった３種類の気付きの質の高まり方がある。

そして、そのような気付きの質を高めるために、「気付きの質を高めるためには、気付いたことを伝えたり、交流したり、振り返って捉え直したりして表現することが大切である。（第５章第１節２）」、「話したり書いたりすることで無自覚だった気付きが自覚されていく。また、伝え合い交流することにより一つ一つの気付きは関連付けられていく。振り返ったりまとめたりすることで、視点を変えて自分自身の成長や変容に気付いていくこともある。（第３章２節（６））」と示されている。このように、生活科の具体的な活動や体験において、それぞれの気付きの質を高めるためには、体験活動を充実させることはもちろんのこと、表現活動の充実も図ることこそが肝要である。

しかし、教育研究員自身の実践の振り返りや教員を対象にしたアンケートの結果（Ⅱ２「調査研究」に後述）によると、体験活動後、文字言語だけで表現させるといったように表現方法が毎回固定化している場合があることが分かった。また、気付きの質を高めるというねらいをもって表現活動を設定していると回答しているにもかかわらず、どのように評価したらよいのか分からないといったことに困惑する教員が多くみられる現状があった。このことは、「『活動あって学びなし』との批判があるように、具体的な活動を通して、どのような思考力等が発揮されるか十分に検討する必要がある。（第１章２（１））」という指摘にもつながることであると考える。

そこで、先述した①「無自覚」から「自覚」、②「個別」から「関連」、③「対象」から「自分自身」といった、３種類の気付きの質がそれぞれ高まるような表現活動を教員が意図的に設定することで、児童が自ら学びを深めていくことができると考えた。

以上のことを受けて、児童が体験活動を基に、気付いたことを多様に表現することを通して生活科における深い学びを実現することを目指し、研究主題を「生活科の深い学びを実現するための表現活動の工夫」とした。

Ⅱ　研究方法と内容

１　基礎研究

研究主題に関わる「深い学び」の実現に向けて、「小学校学習指導要領解説生活編（平成29年７月）」の理解、「教育研究員報告書（平成24年度、平成29年度）」等先行研究の分析をした。これらを通して、研究の方向性及び研究主題に迫る手だてを構想した。

２　調査研究

(1)　調査のねらい

生活科の指導や児童の表現活動等についての実態を把握するため、生活科を担当したことがある教員対象に生活科に関する意識調査及び分析を行った。

(2)　調査概要

ア　調査時期　令和元年９月

イ　調査対象　教育研究員所属校５校及び教育研究員所属研究普及団体（小学校生活）の生活科を担当したことがある教員101名

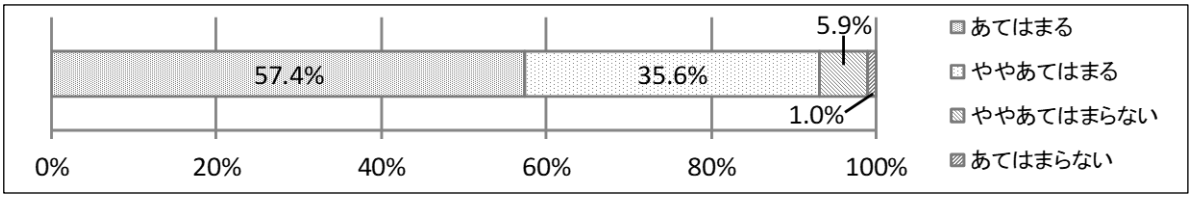
ウ　調査方法　質問紙による選択肢法及び自由記述法

(3)　調査の結果と分析

＜結果＞

ア　設問１　「生活科における表現活動(絵・動作化・学習カードへの記述等)を、ねらいをもって行っていますか。」

図１　設問１「生活科における表現活動（絵・動作化・学習カードへの記述等）を、ねらいをもって行っていますか。」



93.0%の教員がねらいをもって表現活動を行っているかという問いについて、「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答した。（図１）

イ　設問２　「生活科における表現活動は、どのようなことをねらいとして行っていますか。」

自由記述により様々な回答があったが、おおむね表１のような内容であった。

表１　設問２の主な回答内容と回答例

主な回答内容	回答例
①　児童の気付きの質を高めること	・児童の思いや考え、活動で得られたことを表すため ・気付きを自覚させるため　等
②　児童の活動への意識を高めること	・表現の対象を明確にさせるため　・学習材に向き合うため ・関心・意欲を高めるため　等
③　児童が活動を振り返ること	・活動を見つめ直し、以前やったことと比較し気付きや探究につなげるため　等
④　児童が他者と情報共有すること	・学びを広げて深めるため　・新たな気付きを促すため ・伝える活動を通して自らの立場を明確化させるため ・互いの考えを共有するため　等
⑤　児童の学びを評価すること	・形として残し、次の指導や評価につなげるため ・児童の気付きを評価するため　等

ウ　設問３　「生活科の表現活動において、どのような表現方法で行っていますか。」

主な表現方法として、「学習カード」、「絵」、「動作化」を選択式の設問にしたところ、「学習カード」87.1%、「絵」82.2%、「動作化」44.6%という結果となった（図２）。また、取り組んだことのある表現活動について記述式で回答を求めたところ、表２のような表現方法が挙げられた。

図２　設問３「生活科の表現活動において、どのような表現方法で行っていますか。」

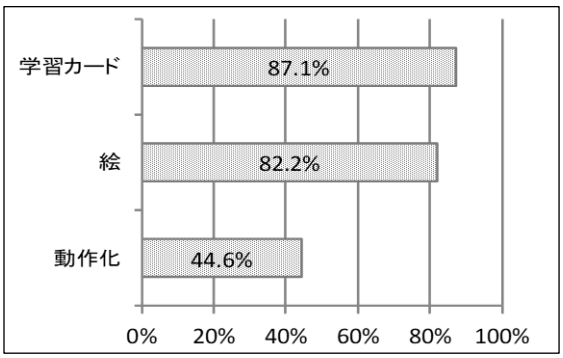


表２　表現方法例（設問３自由記述より）

・ポスター　・パンフレット　・新聞　・手紙
・ちらし　・本　・紙芝居　・日記（文章表現）
・写真　・ビデオレター　・映像　・かるた
・すごろく　・歌（作詞・作曲）　・付箋
・詩　・お店　・俳句　・巻物　・思考ツール
・発表（個・グループ）　・フラッシュカード
・ワークショップ　・ポスターセッション
・伝え合い（教え合い）　・インタビュー
・模造紙（個別の気付きを可視化）　・地図

エ　設問４　「生活科を指導する上で、困っていることはありますか。」

生活科を指導する上で困っていることについては「評価の仕方」46.5%、「振り返りのさせ方」は35.6%、「指導の方法」32.7%、「活動内容の設定」26.7%、「単元計画の作成」10.9%という結果となった。また、それぞれの回答に関連する自由記述欄には、図３の自由記述例のような内容が見られた。

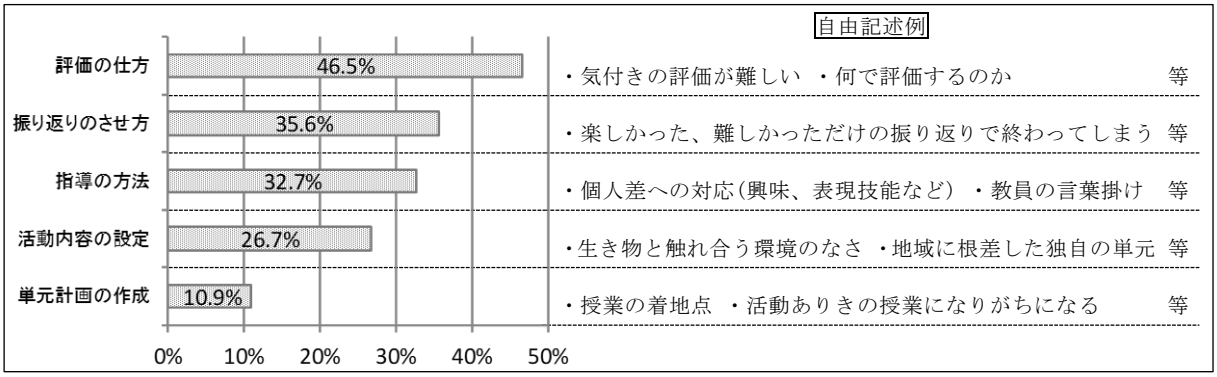


図３　設問４「生活科を指導するうえで、困っていることはありますか。」

＜分析＞

設問１において、ねらいをもった表現活動を行っているということに 93.0%が「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答したが、設問４の回答では「どのように評価したらよいか、規準を明確にすることが難しい。」、「楽しかったといった感想のみで、深まりが見られない。」ということに困惑している教員が多く見られた。設問３では、表現方法として、記述式の学習カードや絵を使用することが多いことが分かった。また、取り組んだことがある表現活動では、様々な表現方法が挙げられた。しかし、設問４では「どのように表現させたら良いか、適切な方法が分からない。」ということにも困惑している様子が見られた。

３　実践研究

研究の視点が有効であるかについて検証授業を行った。

検証授業（１）　第１学年「いきものとなかよし～わたしのダンゴムシ～」

検証授業（２）　第１学年「みんなでたのしむ！あきランド大さくせん！！」

４　研究構想図

小学校学習指導要領解説生活編（平成 29 年７月）
・無自覚だった気付きが自覚されたり、一人一人に生まれた個別の気付きが関連付けられたり、対象のみならず自分自身についての気付きが生まれたりすることを、気付きの質が高まったという。（第２章第１節３（１））
・表現する活動は、気付いたことを基に考え、新たな気付きを生み出し、気付きの質を高める深い学びにもつながる。（第４章２（２））
・生活科においては、気付きの質の高まりが深い学びであると捉えることができる。（第５章第１節２）

児童の実態	教員の実態
・他者との関わりが薄い。 ・継続する活動への意欲が持続しない。 ・活動するだけで、気付きの質が高まっていない。	・児童の体験活動が中心になる傾向があり、適切に表現活動が行われていない。 ・どのような場面でどのような表現活動を行うか明確ではない。 ・表現方法の種類が固定化している。

目指す児童像
思いや願いをもち、体験活動と表現活動を繰り返しながら、
自ら学びを深めていくことのできる児童

研究仮説
児童が体験活動を通して気付いたことを、表現したい方法で表出できるようにすることで、生活科における深い学びを実現することができるだろう。

研究主題
生活科の深い学びを実現するための表現活動の工夫

手だての視点
表現活動の工夫

無自覚→**自覚**　○無自覚だった気付きが自分の中で明確になる表現活動
児童が体験活動を言葉等によって振り返ることができるようにするための工夫
方法例：文章（対象の情報）　絵　写真　地図　模型　図鑑　対象への語り掛け　等

個別→**関連**　○それぞれの気付きを関連付け、新たな気付きを生み出す表現活動
児童が自覚し明確になった気付きを基に考え、比べたり、例えたりすることができるようにするための工夫
方法例：発表　話合い　日記　巻物　劇化　思考ツール（ウェビング、ベン図等）等

対象→**自分自身**　○視点を変えて自分自身の成長や変容に気付く表現活動
児童が新たな気付きを基に、振り返ったりまとめたりすることができるようにするための工夫
方法例：文章（活動全体の振り返り）　手紙　賞状　等

※児童が表現したい方法で表現することができるようにするため、それぞれの気付きの質を高めるために適切であると考えた表現方法を複数用意する。また、多様な表現方法であっても評価することができるように、評価の対象や方法を明確にして学習活動を行う。

【調査研究】
教育研究員所属校教員（５校）及び教育研究員所属研究普及団体教員（４地区）101 名

【基礎研究】
・小学校学習指導要領解説生活編（平成 29 年７月）
・教育研究員報告
「児童の気付きの質を高める振り返り活動の工夫」（平成 24 年度）
「自立し生活を豊かにしていく児童の育成」（平成 29 年度）

Ⅲ　検証授業

指導事例（１）　第１学年（実施時期９月）

１　単元名

「いきものとなかよし～わたしのダンゴムシ～」（全 12 時間＋常時活動）

２　単元の目標

ダンゴムシを飼育する活動を通して、ダンゴムシの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働き掛け､ダンゴムシは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、ダンゴムシへの親しみをもち、生き物を大切にすることができるようにする。

３　単元の評価規準

	①生活への 関心・意欲・態度	②活動や体験についての 思考・表現	③身近な環境や 自分についての気付き
単元の評価規準	ダンゴムシを飼育する活動を通して、生き物への親しみをもち、大切にしようとしている。	ダンゴムシを飼育する活動を通して､ダンゴムシの育つ場所､変化や成長の様子に関心をもって働き掛けている。	ダンゴムシを飼育する活動を通して､ダンゴムシは生命をもっていることや成長していることに気付いている。
具体的な評価規準	ア　身近な生き物に関心をもって関わろうとしている。 イ　ダンゴムシに心を寄せ、繰り返し関わろうとしている。 ウ　ダンゴムシの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって世話をしようとしている。 エ　ダンゴムシに親しみをもち､大切にしようとしている。	ア　ダンゴムシの様子について自分で考えた適切な方法で表している。 イ　ダンゴムシの育つ場所、変化や成長の様子について考え、世話の仕方を工夫している。 ウ　ダンゴムシの生活している環境について考え、世話の仕方を工夫している。 エ　ダンゴムシとの関わりを振り返り、自分なりの方法で表している。	ア　ダンゴムシの特徴、育つ場所、変化や成長の様子に気付いている。 イ　ダンゴムシに合った世話の仕方があることに気付いている。 ウ　ダンゴムシは自分と同じように生命をもっていることや成長していることに気付いている。 エ　自分のダンゴムシへの親しみが増し、上手に世話ができるようになったことに気付いている。

４　単元の概要

本単元は、小学校学習指導要領（平成 29 年３月）第５節　生活　第２　２内容（７）に基づいて設定した（評価規準は、平成 22 年告示の学習指導要領による)。身近な生き物を飼育することを通して、生き物に親しみ、生命の大切さについて、実感をもって感じさせたい。

児童にとって身近であり、採取、飼育・観察のしやすいダンゴムシを飼い、遊びを通して関わる､表現したい表現方法で気付きを表出するといった豊かな体験活動と表現活動を行う。これらを通して、気付きを自覚したり、関連付けたり、対象から自分自身へと視点を変えて捉えたりして気付きの質を高め、深い学びになることを期待して本単元を作成した。

５　主題に迫るための具体的な手だて

(1)　無自覚 ⇨ 自覚 について

ダンゴムシと関わることで、無自覚だった気付きを自覚された気付きにつなげるために、自己の気付きを多様な表現方法で表出できるようにする。ここでは、児童の気付きを引き出すために､いくつか道具を用意し､それらを児童が自由に選択することで､ダンゴムシと様々な関わり方ができるようにした。また、ダンゴムシと関わり、気付いたことを友達に伝えたり､付箋や学習カードに記入して言葉で振り返ったりするといった複数の表現方法を用意し、

それらを児童が選択して表現することで自覚された気付きとして表出できるようにした。

なお、学習カードは、絵での表現を中心とする物、文字での表現を中心とする物、折衷型の物を用意し、各自が選択した方法で表現できるようにした。

(2) 個別 ⇨ **関連** について

一人一人の個別の気付きが関連付けられるようにするために、児童が気付いたことを記入した付箋を貼り、交流することができる「お知らせコーナー」を設置し、口頭で発表する場も設けた。また、幼児との交流の場を設定し、相手意識をもち、気付いたことを表現できるようにした。このことを通して、互いの気付きを共有し、個別の気付きが関連付けられるようにした。

(3) 対象 ⇨ **自分自身** について

ダンゴムシと関わることを通して、自分は生き物を大切に育てることができることや自分は成長していること、自分や友達の得意なことなどに気付くことができるようにする。本授業では、活動の振り返りに、飼育しているダンゴムシに向けて手紙を書く活動をした。

6　学習指導計画（12 時間扱い＋常時活動）

時数	「小単元名」（時数） 〇主な学習活動・児童の反応	□教員の指導・留意点 ☆評価方法・対象【観点】
第一～三時	「どんなところにいるのかな」（３）（本時３／12） 〇ダンゴムシについて知っていることを話し合う。 ・黒いです。 ・触ると丸くなります。 〇校庭でダンゴムシを探して来て、遊ぶ。 ・草の根っこにいたよ。 ・植木鉢の下にいたよ。 〇ダンゴムシと遊んで楽しかったことや発見したことをカードにかいたり、発表したりする。 ・手や服の上に登ったよ。 ・ストローのトンネルを通ったよ。 ・ひもを登ったよ。 ・背中に黄色い点々があったよ。 ・すみっこにいたよ。 ・虫眼鏡で見たら模様や足がよく見えたよ。 〇遊んだ後は、元の場所に返す。 ・もっとダンゴムシと遊びたいな。	□事前に校庭のどこにダンゴムシがいるか調べておく。 □児童の興味・関心を喚起するために、教室でのダンゴムシとの出会いは、実物を見せながら行う。 □各自が選択した方法で表現できるように学習カードは、絵での表現を中心とする物、文字での表現を中心とする物、折衷型の物を用意する。 □観察の道具は、児童の表現に合わせて道具を数種類用意する。 無自覚➔**自覚** ・ひも・ストロー・付箋・塗り絵カード ・虫眼鏡・糸電話（ダンゴムシに話し掛ける） □ダンゴムシを飼ってみたいという気持ちが高まるように、遊んだ後は元の場所へ返す活動を繰り返す。 ☆行動・発言・付箋・学習カード 【①―ア、②―ア】
第四～五時（常時活動）	「できたよ、ダンゴムシのうち」（２）＋常時活動 〇ダンゴムシを飼育するために必要なことを話し合ったり、調べたりする。 ・餌や土が必要だと思うよ。 ・おうちが必要です。 ・登る木があった方がいいよ。 ・石やコンクリートも食べると書いてあるから、入れた方がいいと思うよ。 〇ダンゴムシのすみかを作り、世話をする。 ・ダンゴムシが隠れる場所を作ったよ。 ・湿った土が好きだから、霧吹きを持ってきたよ。	□飼育に必要なことが分かる本や図鑑を置き、児童がすぐに調べることができるようにする。 □どうしたらダンゴムシが元気に生きていけるか考える場を設ける。 □お知らせコーナーを設け、分かったことをすぐに書いて掲示できるようにして、友達との交流を促す。 個別➔**関連** □毎日、お世話タイムを決めてダンゴムシと触れ合うようにする。 ☆行動・発言・常時活動 【①―イ、②―イ、③―ア】

第六～七時（常時活動）	「ダンゴムシのふしぎをみつけた！」（2）＋常時活動 ○ダンゴムシを飼いながら、気付いたことを学習カードにかきためていく。 ・やっぱりすみっこが好きみたいだよ。 ・葉っぱを食べていたよ。 ・土に潜っているよ。 ○世話をして気付いたことを友達と伝え合う。 ・赤ちゃんダンゴムシが大きくなったよ。 ・私のダンゴムシはいつも寝ているよ。	□自分の体のつくりや動き方と比べることができるように観察の時間を十分確保する。 □学習カードは、絵での表現を中心とする物、文字での表現を中心とする物、折衷型の物を用意する。 無自覚➔自覚 □児童の気付きを価値付けたり、他の児童に広げたりすることができるように、お知らせコーナーを活用する。 □「もっとよく見たい」という意欲をもたせ、虫眼鏡を用意し、細かいところにも着目させる。 ☆行動・発言・学習カード 【①―ウ、②―ウ、③―イ】
第八～十一時	「ダンゴムシのふしぎをつたえよう」（4） ○幼児との交流会で、幼児にしてあげたいことを考え、準備をする。 ・いろいろな道具で遊ばせてあげたいな。 ・クイズを出したいな。 ・ダンゴムシを見せながら、説明したいな。 ・ダンゴムシの図鑑を作って見せてあげたいな。 ○幼児に自分のダンゴムシについて紹介する。	□幼児に何をしてあげるか考えるために、いくつかの方法を提示する。 個別➔関連 □伝える方法でグループを作り、話し合いながら準備を進めるように言葉掛けをする。 □幼児に分かる易しい言葉にするなど、相手意識をもって伝えるよう言葉掛けをする。 個別➔関連 ☆行動・発言・作品【②―エ、③―ウ】
第十二時	「ふりかえろう」（1） ○これまでのダンゴムシを育てる活動や自分自身の成長を振り返り、ダンゴムシへの手紙を書く。 ・ダンゴムシを飼って楽しかったです。 ・ダンゴムシの育て方が分かりました。 ・○○さんはダンゴムシの飼い方が上手でした。	□ダンゴムシだけでなく自分たちの成長したことを考えることができるように、それまでにかいた学習カードを見ながら、飼育活動を振り返る場を設ける。 対象➔自分自身 ☆発言・行動・手紙【①―エ、③―エ】

※単元終了後の飼育しているダンゴムシの取扱い（元の場所に返す、飼育を継続する）については、生き物の身になって考えることを通して、児童と相談して決める。

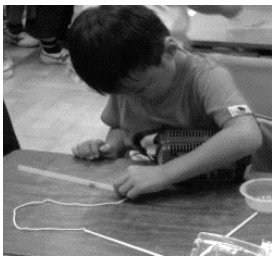
7　本時の学習

(1)　本時のねらい

ダンゴムシに関わる活動を通して、ダンゴムシの様子や体のつくりについて興味をもち、気付いたことを各自が選択した方法で表すことができる。

(2)　本時の展開（3/12 時）

	○児童の学習活動 T：教員の発問等　・予想される児童の反応	□具体的な教員の支援・配慮事項 ☆評価（評価方法・評価対象）
導入5分	○前時を振り返り、めあての確認をする。 ダンゴムシともっとなかよくなろう。 T：ダンゴムシと仲良くなるために、前の時間はどのようなことをしましたか。 T：今日はどのようなことをしたいですか。 ・たくさん遊びたいな。 ・ひもを登らせたいな。 ○約束の確認をする。	□児童が思いを想起するために、前時までの活動を振り返る。 □ダンゴムシは命がある生き物なので大切に扱うことを確認する。 □活動時間を確認する。 □遊んだり、観察したりしながら気付いたことを各自が選択した方法で記録することを伝える。
展開①	○ダンゴムシと遊びながら、観察したり各自が選択した方法で表現したりする。 T：用意したいろいろな道具を自由に使って、	□児童が気付いたことを友達に伝えやすいように机をグループの形にしておく。

25分 展開② 10分	ダンゴムシともっと仲良くなりましょう。 T：途中で気が付いたことは、付箋に書いておきましょう。  ・丸まりました。 ・競走させたいです。 ・手に乗せてみよう。 ・ひもの上を歩かせよう。 ・背中はどんな色かな。お腹はどうかな。 ・足は何本あるのか虫眼鏡で見てみよう。 ・鉛筆でコースを作ろう。 ○活動を振り返り、気付いたことを学習カードに記入する。 T：いろいろな道具を使って、どんな遊びをしましたか。どんなことに気が付きましたか。 学習カードより ・ぼくはつなわたりで、ダンゴムシがゴールしたとき、すごいなあとおもった。おなかにたまごがあった。 ・もしもしでんわでコソコソってきこえたよ。 ・やっぱり、はじっこにいっぱいいってたよ。 ・友達のダンゴムシとレースをしました。 ・足がたくさんありました。 ・ストローのトンネルを歩いたよ。 ・ひもを縦にしたら下から上に登ったよ。 ・背中に黄色い点々があった。	□遊びや観察・気付いたことの記録に使える物を用意しておく。 無自覚➔**自覚** ・ひも・ストロー・虫眼鏡 ・付箋・塗り絵カード ・糸電話（ダンゴムシに話し掛ける） 【児童の姿】 道具を使ってダンゴムシとじっくり遊ぶことで、ダンゴムシの体のつくりや動き等について気付くことができ、無自覚から自覚へと気付きの質を高めた。 ☆ダンゴムシを大切に扱い、関心をもって関わろうとしている。 ①―ア（行動・発言・付箋） □学習カードは、絵での表現を中心とする物、文字での表現を中心とする物、折衷型の物を用意し、各自が考えた方法で表現できるようにする。 無自覚➔**自覚** 【児童の姿】 遊びながら気付いたことを塗り絵カードや付箋に書くことで、ダンゴムシの体の模様や動きの特徴等を表すことができ、無自覚から自覚へと気付きの質を高めた。 ☆ダンゴムシと遊び、その様子を自分で考えた適切な方法で表現している。 ②―ア（行動・発言・付箋・学習カード）
まとめ・振り返り 5分	○ペアで学習カードに記入したことを伝え合う。 T：気が付いたことを友達に伝えましょう。 ○めあての振り返りをする。	□相手の方を向いて気付いたことを伝える。 □学習カードが途中でも、内容を伝えるようにする。 □友達の発表に感想を伝える。 □学習カードの自己評価欄に印を付けて活動を振り返る。

8　検証授業を振り返って

(1)　手だての視点 無自覚 ⇨ **自覚** について

授業当初､児童がダンゴムシについて知っていることは､主に｢黒くて足がたくさんある。｣､｢丸くなる生き物である。｣であった。第２時に児童は机の上で遊ぶことで、ダンゴムシの動きに注目し、その面白さに気付き始めた。ある児童が虫かごについているひもにダンゴムシを登らせる姿を見て、他の児童にもやってみたいという気持ちが広がった。また、真っすぐ歩くだけでなく逆さまにぶら下がって歩くこと、手や服の下から上に歩くこと、飼育ケースの隅を沿うように歩くことに注目が集まった。

第３時には、遊ぶ道具として、ひも、ストロー、虫眼鏡、付箋、塗り絵カード、糸電話を用意した。ひもを登らせたり、飼育ケースの中を歩かせたりすることで､｢やっぱりひもが好きみたい。｣､｢やっぱり、はじっこにいっぱい行った。｣等と学習カードに記入し、前時で気付いたことを言語化して表すことができた。また、虫眼鏡でダンゴムシをよく観察することで､｢片側に足が７本ある。｣､｢お腹に卵があった。｣とさらに自覚された気付きとすることができた。自分の腕や肩を登らせることで、ダンゴムシは下から上に登ること、また、ストローのような細い所を歩くことに多くの児童が気付き、表現した。ダンゴムシの背中の黄色い点々を見付け、塗り絵式のカードに表す児童もいた。活動中に付箋を活用して､｢めすだったよ。｣､｢つなわたりをしたよ。｣､｢死んだふりがうまい。｣と、その都度気付いたことを記入する姿も見られた。

ダンゴムシと遊ぶ様々な道具や表現方法を用意することは、児童が無自覚だった気付きを自覚された気付きとして表出することに有効だった。

(2)　手だての視点 個別 ⇨ **関連** について

第５時以降、毎日「お世話タイム」を設け、児童は世話をしながら他の児童とダンゴムシの様子を交流することを通して､｢昼間は寝ていることが多い。｣､｢すみっこが好き。｣､｢土に潜る。｣等のことが共通していることに気付いた。それらの気付きは付箋に書き、お知らせコーナーに貼り、毎日発表する時間を設定した。そこでは、友達の発表を聞いて自分のダンゴムシも同様であることを確かめる姿が見られた。また､｢脱皮した。｣､｢前より大きくなった。｣､｢生まれた赤ちゃんが大きくなった。｣とダンゴムシの成長の姿にも気付く様子が見られた。

幼児にダンゴムシを紹介する場では、それまでに気付いたことや調べたことを、言葉や絵を用いて表現した作品を基に、自信をもって知らせることができた。

(3)　手だての視点 対象 ⇨ **自分自身** について

学習の最後にダンゴムシへの手紙を書いた。ダンゴムシと楽しく遊んだことを思い出すとともに、ダンゴムシの世話がうまくできるようになった自分にも気付くことができた。世話が上手だと児童同士で称賛し合う場面もあり、自分の得意なことに気付く児童もいた。

課題として、ダンゴムシを飼育する期間が長くなったことから、飼育する意欲が低下した児童が見られた。このことから、児童が意欲を持続できる時間を考慮し、短期間に集中して世話をする学習計画を立案すること等の手だてを考える必要がある。

指導事例（２）　第１学年（実施時期 10～11 月）

１　単元名

「みんなでたのしむ！あきランド大さくせん！！」（全 15 時間＋常時活動）

２　単元の目標

秋の実や葉等を利用して遊んだり、校庭にある木や畑で遊んだりする活動を通して、夏と秋の違いや特徴を見付けたり、遊びに使う物を工夫して作ったりすることができ、秋の自然の様子や夏から秋の変化、それを使った遊びの面白さに気付くとともに、季節の変化を取り入れて、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとすることができるようにする。

３　単元の評価規準

	①生活への 関心・意欲・態度	②活動や体験についての 思考・表現	③身近な環境や 自分についての気付き
単元の評価規準	秋の実や葉等を利用して遊んだり、校庭にある木や畑で遊んだりする活動を通して、季節の変化を取り入れて、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしている。	秋の実や葉等を利用して遊んだり、校庭にある木や畑で遊んだりする活動を通して、夏と秋の違いや特徴を見付けたり、遊びに使う物を工夫してつくったりしている。	秋の実や葉等を利用して遊んだり、校庭にある木や畑で遊んだりする活動を通して、秋の自然の様子や夏から秋の変化、それを使った遊びの面白さに気付いている。
具体的な評価規準	ア　秋を感じる物に関心をもち、身の回りの自然や物に積極的に関わろうとしている。 イ　校庭や川、公園等の自然に繰り返し関わり、それぞれの場所での自然の様子を見たり感じたりしようとしている。 ウ　秋の物を使った遊びの中で、みんなで楽しく遊ぼうとしている。	ア　校庭や公園等の身近な場所から夏との違いやそのものの面白さを見付け素直に表している。 イ　秋にある物を予想したり、遊ぶことを見通したりしながら、活動の計画を立てている。 ウ　集めた秋の物を比べたり、例えたり、試したりしながら遊びを考えている。 エ　活動を振り返り、秋の思い出や秋について分かったことや感じたことを学習カードに表している。	ア　校庭等の環境の変化から、季節の移り変わりや秋の自然の特徴に気付いている。 イ　秋の自然を生かした遊びや遊びに使う物をつくることの面白さに気付いている。 ウ　秋の物を使って遊びながら、遊びの面白さや自然の不思議さに気付いている。 エ　季節の変化による遊びや生活の変化を感じ、季節の変化と自分の生活との関わりに気付いている。

４　単元の概要

本単元は、小学校学習指導要領（平成 29 年３月）第５節　生活　第２　２内容（５）及び（６）に基づいて設定した（評価規準は、平成 22 年告示の学習指導要領による）。児童に遊びを創り出す楽しさや友達との関わりをもって遊ぶことの楽しさを味わわせたい。自然を生かした秋の遊びをしたり、身近にある物を使って簡単な遊び道具を作ったりすることを通して、遊びの面白さや自然の不思議さに気付くことができる。さらに、自分が興味ある遊びを試したり、作り直したりするといった、作る活動を繰り返すことを通して問題を解決する力を育むとともに、遊ぶ楽しさやきまりの大切さに気付くこともできると考える。そして、友達と一緒に遊ぶために遊び方を工夫したり、約束やルールを作ったりして、友達と関わりを広げたり深めたりすることができる単元であると考える。

秋探検や身近な秋の物を使って遊ぶ、表現したい表現方法で気付きを表出するといった豊かな体験活動と表現活動を行うことで、気付きを自覚したり、関連付けたり、視点を変えて

捉えたりして気付きの質を高め、深い学びになることを期待し、本単元を作成した。

5　主題に迫るための具体的な手だて

(1)　無自覚 ⇨ **自覚** について

無自覚な気付きが自覚された気付きへと気付きの質を高めるために、秋の素材遊びを行いながら気付いたことを絵や言葉で表現できるようにした。体験活動を通して気付いたことについて、絵での表現を中心とする物、文字での表現を中心とする物、折衷型の物等、多様な方法で表現できるように複数の学習カードを用意し、各自が選択した方法で表現できるようにした。

(2)　個別 ⇨ **関連** について

個人の中で個別の気付きを関連付いた気付きへと気付きの質を高めるために、環境設定の工夫や教員の言葉掛けの工夫を行った。

環境設定の工夫では、体験活動を通して比べる、例えるという思考が働くように様々な秋の物を準備した。言葉掛けの工夫では、友達と互いに気付きを共有し、個別の気付きを関連付けることを図った。具体的には、児童が遊びから素材の形や重さの特徴、遊び方の工夫と関連付けていけるように、体験活動時、「秋の実によって、転がり方は違うのですね。なぜなのでしょう。」と友達の活動にも意識を向け、交流することができるようにした。特に小単元の最後には、それまでの気付きが関連付くように、自分が気付いたことやもっとやってみたいことなどについて、友達と話し合う時間を確保した。

また、素材遊びでは直接素材に働き掛けて気付いたこと同士が関連付くように、遊ぶスペースを素材ごとに分けたり、各素材について気付いたことを整理できる「仲良し掲示板」を設置したりした。

(3)　対象 ⇨ **自分自身** について

対象への気付きから自分自身についての気付きへと気付きの質を高めていくために、本単元では、単元内の様子を時間経過で振り返ることのできる「絵本」、「紙芝居」、「振り返りカード」といった表現方法と、視点を変えて振り返ることのできる「手紙」、「賞状」という表現方法を設けた。その中から、各自が表現したい方法を選択し、これまでの活動を振り返ることができるようにした。

6　学習指導計画（全 15 時間＋常時活動）

時数	「小単元名」（時数） ○主な学習活動・児童の反応	□教員の指導・留意点 ☆評価方法・対象【観点】
常時活動	・セミじゃなくて違う虫が鳴いているよ。 ・夏ランドみたいに次は秋ランドもやりたいな。 ・風が涼しくなってきたね。	□児童の思いや願いを高めるために、他教科等の学習や常時活動における児童のつぶやきをきっかけに、単元をスタートする。
第一時	「あきがきたよ！」（2） ○園での遊びや生活の経験を振り返り、自分のしたい遊びを決めて遊ぶ。 ・ドングリを湖に浮かべたよ。 ・きれいな葉っぱで遊んだよ。 ・池の周りの道でいろいろな秋を探したね。	□活動を発展させるため、園ごとの違いに対する共感や驚きを大切にする。 □整理できるように、付箋に書かせる。 無自覚➔**自覚** ☆観察・付箋【①－ア、②―ア】

第二時	○第１学年の秋にみんなで遊びたいことを出し合い、秋遊びの計画を立てる。 ・秋探検に行って、材料を探したいです。 ・秋のときだけできることって何かありませんか。 ・いろいろな秋の材料で秋遊びをしてみたいです。	□計画を立てる前に、具体的なイメージをもたせるための体験活動を入れる。 □整理できるように、付箋に書かせ、分類しながら遊びを整理する。 無自覚➔自覚 ☆観察【②－イ】
第三～十二時	「あきとあそぼう！」(10)（本時５/15） ○みんなで話し合って決めた遊びを、みんなで楽しむ。 〈予想される遊び〉 ①秋探検(校庭や学校周辺)→②素材遊び ・落ち葉かけ(シャワー)　・ドングリ転がし、回し ・ひんやり探し　・葉を何かに見立てる遊び　等 ○これまでの活動や作品を基に、振り返りを行い、次に行いたいことを考える。 ○遊びをもっと楽しくするための工夫を考えながら、遊びを楽しんだり、言葉や絵等で表現したりする。 〈予想される遊びの種類〉 秋の素材を使った様々な遊びを考えて遊ぶ ・こま回しバトル　・秋のアクセサリー作り ・秋の楽器作り(→演奏) ・いろいろなドングリがあって面白かったです。いろいろな形を使ったコマを作って遊びたいです。 ・夏と違って、きれいな葉っぱがたくさん落ちていたから葉っぱで洋服を作りたいです。 ・秋はいろいろな材料があって迷います。秋のオリジナル楽器を作って演奏会を開きたいです。 ○これまでの活動や作品を基に、振り返りを行い、次時に行いたいことを考える。	□学習カードや道具は、児童の表現したい方法に合うよう数種類用意する。 無自覚➔自覚 □秋の素材で気付いたことが関連付くように、素材ごとの「仲良し掲示板」を設置する。 個別➔関連 ☆観察・行動・作品 【①－イ、②―ア、③―ア・ウ】 □遊びごとに場所を決めたり、全体で共有したりできる環境や時間を設定する。 個別➔関連 □活動の発展の様子や児童が考えた工夫等の記録を、児童と一緒に作り、掲示をして可視化する。 □遊びの工夫を楽しむことができるように、児童の興味・関心を見極めながら、体験活動の合間に教室での話合い等を位置付け、遊びを焦点化していく。 □遊びごとに場所を決めたり、全体で共有したりできる環境や時間を設定する。 個別➔関連 □気付いたことや次にやりたいことを書き残し見通しをもって活動できるように毎時学習カードを書く時間を設ける。 個別➔関連 ☆発言・行動・作品 【①－ウ、②―ウ、③―イ・ウ・エ】
第十三～十五時	「たのしかったね！あきのあそび」（３） ○本単元の終末の活動を考え、これまでの遊びで楽しかったこと等を振り返り、成長した自分を絵や言葉等の方法により表現する。 ・最初は、秋の物であんまり遊んだことがなかったけれど、遊んでみて、秋の物って楽しい物がたくさんあるんだなって思いました。 ・秋と仲良くなることができました。遊ぶうちに秋のいろいろなことが分かって、楽しく遊ぶことができたからです。 ・○○さんへ。あなたは、わたしとたくさん遊んでくれましたね。葉っぱ遊びもしたし、木の実でもたくさん遊びました。わたしはあなたと遊べてとっても楽しかったです。もう仲良しで、親友ですね。来年の秋もまた、たくさん一緒に遊びましょう。秋より(秋からの手紙を書いた児童の作品より)	□活動の中に、単元全体の振り返りや友達との伝え合いが入るように話合いを支援する。 □振り返る際に、これまでの遊びの写真や授業の板書、作ってきたおもちゃ等を提示することで、児童がこれまでの体験を想起しながら、振り返ることができるようにする。 □時間軸で振り返ることのできる絵本や振り返りカード、視点を変えて振り返ることのできる手紙や賞状等の多様な表現方法を準備する。 対象➔自分自身 ☆作品【②－エ、③―エ】
常時活動	・息が白くなってきました。 ・地面を踏むと、サクサクって不思議な音がなりました。 ・冬はどんな遊びをしようか楽しみです！	□冬の遊びの単元に向けて、常時活動の中で季節の変化に目を向けさせていく。

7　本時の学習

(1)　本時のねらい

秋の物を使って遊んだり、秋の物をじっくり見たりすることで、秋の物を使った遊びの面白さや秋の自然の不思議さや特徴に気付くことができる。

(2)　本時の展開（５/15 時）

時	○児童の学習活動 Ｔ：教員の発問等　　・予想される児童の反応	□具体的な教員の支援・配慮事項 ☆評価（評価方法・評価対象）
導入 5 分	○教室で本時の活動について話し合い、めあてを立てたり見通しをもったりする。 じぶんが　えらんだ　「あき」と　なかよくなろう。 Ｔ：秋と仲良くなるために、前の時間はこんなことをしましたね。今日は、どんなことをしたいですか。 Ｔ：○○と○○で同じ遊び方ができますか。 Ｔ：松ぼっくりにもこんな秘密が隠れているのですね。他の秋の物でもびっくりする秘密を見付けた人はいますか。	□教員は、児童の発言をつなぎ、児童同士が関わり合いながら話し合えるようにする役割を担う。 □計画を書き込んだ模造紙や前時までの活動の様子の写真を提示することで、活動に対する具体的なイメージをもてるようにする。 □「なかよくする＝①あそぶ、②よくしる」ということを確認することで、活動の見通しをもてるようにする。 □児童同士の考えの違いを生むための発問を投げ掛ける。
展開 25 分	○集めた秋の物を使って、遊んだり調べたりする。 （校庭） Ｔ：秋の実によって、転がり方は違うのですね。なぜなのでしょう。 （遊び→素材の形や重さの特徴→遊び方の工夫） Ｔ：色や形をよく見るとこんなに違うのですね。何か、身の回りで他にも似ている物がありませんか。 （見立て→ごっこ遊び） <実際に行った遊びの姿> □葉 ・葉っぱかけ・葉っぱベッド・葉っぱ調べ ・見立て遊び □秋の実 ・秋の実転がし(回し)・秋の実投げ・見立て遊び	□児童の気付きを引き出すために、児童のつぶやきに対して問い返したり、教員が言語化して価値付けたりする。 □児童の考えの深まりを生む発問を投げ掛ける。 無自覚➔**自覚** □秋の素材ごとに活動スペースを分けることで、気付きが関連付くようにする。 個別➔**関連** 【児童の姿】 同じ種類の木の実や違う種類の木の実の転がり方を比べながら、重さや形、転がり方等、個別の気付きを関連付けた遊びをした。 □活動スペースごとに、その素材の「仲良し掲示板」を設置することで、気付いたことを可視化し、関連付きやすくする。 個別➔**関連** 【児童の姿】 秋の木の実や葉、枝を他の物（ライオン、料理等）に見立てて表し、秋の物と同じ色や形等、個別の気付きを関連付けた。 ☆秋の物を使って遊びながら、遊びの面白さや自然の不思議さに気付いている。 ③―ウ(行動観察・作品)

まとめ・振り返り15分	○本時での活動について振り返ることで、工夫したことを言葉でまとめたり次時への見通しをもったりする。(グループ共有→全体共有) T：自分が選んだ秋の物と遊んだり調べたりして、どんなことに気付きましたか。 ・ドングリはドングリでも小さい物も大きな物もあります。それを使って、ライオンをドングリでかきました。 ・いろいろな色の葉っぱでお料理を作りました。同じ木の葉っぱなのに色が全然違いました。 ・木の実は全部回るけど、一番真ん丸で重さが重いカリンが一番よく回りました。	□グループごとに気付いたことを書き、同じものを重ねたり気付いたことをつなげたりしていくことで、気付きが関連付くようにする。 【児童の姿】 秋の物に対する自分の気付きを付箋に書き、仲良し掲示板の「つながる気付き」や「似た気付き」の近くに貼ることで他の児童の気付きとも関連付けていた。 □教員は、児童が気付いたことを思い出したり、友達の意見と関連付けたりするために、活動を思い起こす助言や児童の発言をつなぐ役割をする。 個別➔**関連**

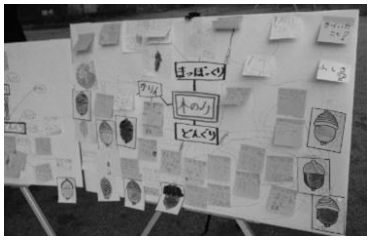
8　検証授業を振り返って

(1)　手だての視点 無自覚 ⇨ **自覚** について

無自覚な気付きから自覚された気付きへと気付きの質を高めるために、素材遊びを行いながら気付いたことを絵や言葉で表現できるように、絵だけ、言葉だけ、絵と言葉等様々な方法で表現できるように複数の学習カードを用いた。「葉っぱの音がカサカサだった。」、「カリンはよく転がった。」等、一人一人がたくさんの気付きを絵や言葉で表現しており、無自覚な気付きが自覚され、気付きの質が高まったと考える。また、気付いたことを付箋に書き込む児童もいれば、絵を描いて木の実の色や形について気付いたことを表現する児童もいた。気付いたことに適した表現方法を選ぶ姿や、文字表現が苦手な児童も絵で気付きを表現していた姿から、複数の学習カードを用いるのは効果的であったと考えられる。

(2)　手だての視点 個別 ⇨ **関連** について

「比べる」、「例える」という思考が働くことで、個別の気付きから関連付いた気付きへと質が高まるように、様々な秋の物を準備するといった環境設定の工夫や、教員の言葉掛けや友達との気付きの共有といった他者との交流が図れるようなウェビング形式の「仲良し掲示板」を設置した。ここでは、「細長い物より丸い物のほうがよく転がる。」と、いろいろな種類のドングリや木の実を比べながらよく転がる木の実を見付けたり、「この葉っぱの形が魚みたいだから焼き魚を作った。」と葉の色や形を飲み物や料理に例えたりする児童の姿が見られた。これらの姿から、個別の気付きが関連付いた気付きへと気付きの質が高まったと考える。今後、個別の気付きを関連付ける方法や関連付いていることがより可視化される方法、仲良し掲示板を活用した交流方法については更に検討する必要がある。



Ⅳ　研究のまとめ

本部会では、３種類の気付きの質を高めるための表現活動における指導の工夫に着目し、研究を進めてきた。以下に成果と課題をまとめる。

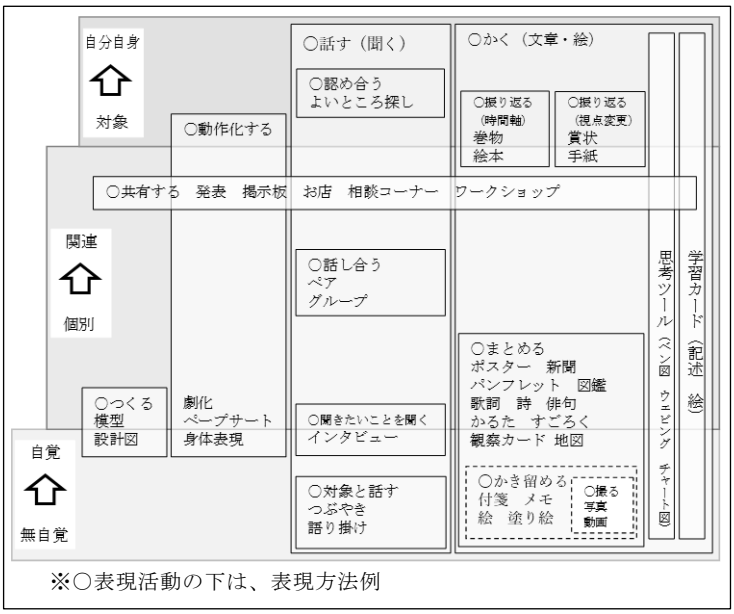
１　表現活動について

(1)　成果

ア　絵を描く、絵と文をかくなどといった種類はあるものの、学習カードという固定化した表現方法ではなく、児童が表現したい方法を選択することができるように多様な表現方法を用意した。このことで、これまで言葉で表現することに課題があった児童が絵や立体作品で学習対象の特徴を表すことができた。また、表現したいことに合わせて表現の方法を選択していくといった自己決定をする児童の姿が多く見られた。

イ　生活科を担当したことがある教員対象のアンケート結果や教育研究員のこれまでの実践等を基に、「無自覚」から「自覚」、「個別」から「関連」、「対象」から「自分自身」といった気付きの質の高まりに合わせた表現活動を意図的に行うために想定される活動を「気付きの質の高まりと表現活動の関連表」（表３）とした。

表３　気付きの質の高まりと効果的な表現活動の関連表



※○表現活動の下は、表現方法例

(2)　課題

気付きの質の高まりに応じて、想定される表現活動を「気付きの質の高まりと表現活動の関連表」にまとめたが、全ての活動について検証するには至らなかった。これらの活動がそれぞれの気付きの質を高めていくことに効果的であるか、更に検証する必要がある。

２　気付きの質の高まりについて

(1)　「無自覚」から「自覚」について

ア　成果

十分な体験や活動の中で、つぶやき、絵、語り掛け等、表現方法を複数設定したことで、児童は主体的に表現方法を選び、様々な気付きを表現するといった姿が見られた。このことから、無自覚から自覚へと気付きの質を高めるための表現方法を複数設定することは効果的であると言える。

イ　課題

検証授業では、児童が選択した表現方法に応じて、適切な評価をするために、授業時に教員が求める児童の姿を具体化し評価規準として設定することや座席表型カルテや付箋、

写真を用いて一人一人の学びを記録することを行った。このことにより、多様な表現方法であっても児童の学びを評価していくことができたと考える。しかしながら、担任が一人で、効率的に評価することについては課題がある。今後、児童の表現方法が多様であっても効率的に評価する方法を研究する必要がある。

(2)　「個別」から「関連」について

ア　成果

児童の比べる、例えるという思考が働くように、対象を別の物と比較することを促すような教員の言葉掛けや、友達と気付きを共有ができる「共有スペース」等、環境設定の工夫などの手だてを講じた。特に共有スペースにおいては、個別の気付きから関連した気付きへと気付きの質が高まる児童の姿を多く見ることができた。

イ　課題

共有スペースの在り方については、「何を」、「どこに」、「どうやって」表現させるかを吟味することの難しさが残った。用意する共有スペースに気付いたことを付箋で種類別に分類して貼るように実施するのか、ウェビングのように共有スペースに書き込まれた気付きをつなげていくのか等、個別の気付きを関連した気付きにするための表現方法について検証していく必要がある。また、小単元内のどこで児童が気付きを表出し、その表出された個別の気付きを、児童自身又は教員がどのタイミングで関連付けていけばよいかについても複数の単元計画を用意し検証する必要がある。

(3)　「対象」から「自分自身」について

ア　成果

学習対象に繰り返し関わり、視点を変えたり、時間軸での自己の成長を振り返ったりすることのできる表現活動を行うことによって、児童自身が活動に対しての振り返りがしやすくなった。例えば、「ダンゴムシの特徴」といった対象への気付きから「ダンゴムシをしっかり育てることができた自分自身」への気付きへと自分自身の変容に気付く児童の姿が多く見られた。

イ　課題

自分自身についての気付きとするために、事例（１）で設定した手紙を書く活動は「自分からダンゴムシ」等の「自分自身から対象」へ書くこととした。そこでは、先述したような姿が見られたが、より自分自身についての気付きを高めるためには、「ダンゴムシから自分自身」というように、「対象から自分自身」へ手紙を書く活動を行うことも考える。引き続き、表出させたい気付きと表現活動の在り方について検証していきたい。

以上のことから、児童が体験活動を通して思いや願いをもち、表現したい方法で気付きを表出することで気付きの質が高まること、すなわち生活科における深い学びの実現につなげることができると考える。今後、どの単元においても評価の対象や方法を明確にし、「表現活動を意図的に設定」することを通して、生活科の深い学びが実現できるよう指導の工夫をしていく。また、３種類の気付きの質の高まりそれぞれに適した表現活動と、それらを効率的かつ効果的に評価していくことの研究についても深めていく必要がある。

平成 31 年度(2019 年度)　教育研究員名簿

小学校・生活

学　校　名	職　名	氏　名
杉並区立沓掛小学校	主任教諭	博多知美
杉並区立八成小学校	主任教諭	鈴木祥子
板橋区立板橋第十小学校	主任教諭	永吉裕子
日野市立日野第一小学校	主任教諭	◎杉田美之
奥多摩町立氷川小学校	教　諭	安藤浩太

◎　世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事　　羽仁　克嘉

平成 31 年度(2019 年度)

教育研究員研究報告書
小学校・生活

令和２年３月

編　　集　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　　（０３）５３２０―６８４９